

くにたちPoDメンバー手記

——くにたち市民から見たPoD

『くにたちPoD』Vol.1 特集 「院生講座前日譚(1)」

(二〇一六年六月二七日発行) より転載

公民館職員から見たくにたちPoD

高下由合 (国立市公民館職員)

はじめは二〇一二年七月。国立市公民館で例年開催されてきた「くにたち地域活動入門」という連続講座がスタートしました。主な対象者は国立市民。地域活動のスタートアップを学ぶという趣旨で、月に一回程度、全五回実施。講座は、「そもそも地域活動って何なのか」「まちづくりとは何なのか」を学ぶことから始まりました。くにたちで地域活動が活発に行われてきた歴史を知る回も設定し、講師には一橋大学のOBや教授の方々をお迎えしました。というのも、この講座は、くにたちで活動していく市民を応援する講座。くにたちに密着するという趣旨の下に、あえて講師も地元の方々にお願いしたのです。

最終回では「自分にできることは何かを考える」ワークショップを行い、輪を広げるあいさつ運動、理髪や包丁研ぎのボランティア、

シニア世代の活動や生きがいづくりなど、さまざまなアイデアが出ました。しかし一方、「くにたち市内には一橋大学があるけれど、市民と学生との関わりが薄い」という問題も提起され、その解決策として、「誰もがなじみのある本」を媒介にすれば、地域と大学がつながる可能性があるのではないかと、という提案が出されました。

この提案に対して、一橋大学大学院言語社会研究科の武村知子教授から「地域と大学がコラボレーションして、出版社をつくったらどうだろうか?」というアイデアをいただきました。そのアイデア実現のため、まずは本^本や出版^{出版}の知識を学ぶ勉強会をしながら、市民と大学の人々が「顔見知りになる」ところから始まったのが、通称「くにたちPoD」。一橋大学の教授、大学院生、くにたち市民、公民館職員、合わせて十人が月に一回、一橋大学内の一室に集いました。この文章を書くために当時の資料を探したら、「PoD」にはこんな意味があったそうです。「るつぼ」「Printed on Demand」「potamus diabano 川を渡る」。広辞苑によると「るつぼ」は「興奮・熱狂の場のたとえ」「種々のものが入りまじった状態のたとえ」との意。ふり返ると、「くにたちPoD」は本来に、そのような場であったと思います。夜七時集合、終了予定時刻は九時だったような気がするけれど、九時に終わったことはあまり無かったような…。誰もが自由に自分の考えを発言できるその時間、あっという間に過ぎてしまいました。

本^本をきっかけとした集まりは、途中から「道徳教育」についての学習会へと姿をかえました。道徳の教科化という動きに対して、

たとえば高校ではどういいう道徳授業が実施されたら良いだろうかとか、新しいカリキュラムを考え、自分たちで体験しながら検討を重ねてきました。

ある時「市民が大学院生と一緒に学ぶことが、とても良い刺激になってる」「大学院生の発表の場所が少ない」との声がメンバーからあがり、「じゃあ、公民館で、大学院生が自分の研究内容を発表する講座を実施したらどうだろう……」という話になりました。

そして実現したのが二〇一四年二月へ一橋大学大学院生講座第一弾『映画の音響効果学——見えない声から何かが見える?』。講師はくにたちPODのメンバー、片岡佑介さん。くにたちPODのメンバーも見守るなか、十七名の参加があり「少しマニアックな内容だけど興味深い知識を得ることができた」「これからもいろいろな分野の大学院生の方にお話を聞きたい」等の感想をいただきました。その後、大学院生さんが講師を務める講座を定期的に実施し、徐々に市民の方にも認知されてきました。講座で取り上げる内容に興味関心を持って参加される方もいれば、大学院生が講師を務めるということ自体に興味を持って参加してくださる方も増えてきました。この講座が、大学院生と市民が学び合い、その後の学びにも良い刺激を与える場であると嬉しいです。

このように、いろいろな思いが重なって、一橋大学大学院生講座はうまれました。そしてこの冊子を通して、この講座がもっともっと広まっていくことを望みます。

くにたちPODに参加して

松本良一（国立シニアボランティアクラブ「WING」会員）

地方都市での工場勤めが長く、社宅と工場の往復の毎日から、多摩の国立市に居を定めて約二十年、生活環境での文化的雰囲気は様変わりしました。東京での新聞社や大学など主催のフォーラムやシンポジウムへの参加、それにもまして地元公民館の多方面に渡る講座があり、ボランティア活動と共に色々な事を楽しく学び、経験させて戴いています。

そんな中、二〇一二年にくにたち公民館主催の「地域活動入門」と言う五回連続の講座を受講しました。一橋大学の先生からは地域に密着した活動を通して生き甲斐と何等かの寄与に結び付ける為の考え方や進め方についてお話があり、又活動を実施された方からの事例紹介などもありました。最終回では「自分たちで何が出来るか」というワークショップがあり、いろいろ出て来たアイデアの中に「くにたちの市民と地域の学生を『本』を介してつながりを深められないか」との提案がありました。ここから、一橋大OBの間瀬さんをコーディネーター役として、一橋大学大学院（武村教授とそのゼミの博士課程大学院生三名）、公民館（職員二名）及びくにたち市民（四名）の計十名のメンバーで「くにたちPOD」が立ち上がりました。

まず、大学・公民館・くにたち市民による「本づくり」の勉強をやりながらメンバー相互の顔見知り深めることから始めましたが、丁度文部科学省の道徳教育に関する指針が出された事で、中

学・高校生対象に「どの様な内容が必要だろうか考えてみよう」との提案が武村先生よりあり、くにたちPODのテーマとしては「中学・高校生の道徳教育について考える」事になりました。

道徳教育と言えば、昭和に入り軍国主義化が進み、太平洋戦争と共に更に狂気と言っても良い状況になって小学校が国民学校に改称された期間に入学した私にとって、極端な軍国教育になった修身が思い出されます。例えば給食は「兵隊さんありがとう」と手を合せてから戴きました。腹ペコの子供にも「欲しがりません勝つ迄は！」とか「鬼畜米英」などがくり返し目や耳に入ってきました。

それが敗戦と同時に「豊かで自由な民主国家アメリカ」となり修身は廃止、国語などの教科書の不都合な所は墨で黒く塗りつぶす日々が続きました。私自身子供にもとまどいがあり、何となく不信感を抱きました。先生も困惑とともに責任感に悩まされた方が多かったと思います。

どの時代であろうと子供達がお互いに幸せで住み良い社会や国を作る担い手としての人間形成の教育は必要だと思います。特に道徳教育では内容の如何にかかわらず一方的な押し付けだけでなく、子供達がお互いの意見を交す話し合いの場も設け、自分で考える力を持ち、他人の考えも受け入れる指導が求められ、教育・指導の先生にとっても難しく重い任務となるでしょう。

くにたちPODでは武村先生より二時間程度の道徳授業を考えるという宿題が出ました。その際にメンバー各自が出した提案をベースに「くにたちPOD道徳教育カリキュラム」の素案を先生がまとめられ、それに従って各提案者のテーマを月一回のペースで、一年

間ゼミ形式で進めました。検討内容は道徳(教育)の歴史、現在の実施例、市民と公共性、現在の社会問題の例、偉人伝(色々な切口で考察)、生と死について、ユニークなものとしては尻とりワークショップ等。毎回フリートーキングを含めて、いつの間にか予定時間オーバーの、私には楽しく又物事を色々な面から考える良き時間でした。

特に若い大学院生の皆さんの発想の豊かさに接し、久しぶりに新鮮で若返った気持ちになりました。

くにたちPOD——未知の学び空間

三好紀子(国立市民生委員、児童委員)

1 くにたちPODとのかかわりが生まれる

きっかけは、『国立人倶楽部』でいっしょに活動している方の一人がくにたちPODの最初の会合に参加されたことから始まりました。

『国立人倶楽部』は、リタイアした国立市民が高齢者の居場所づくりという形で地域貢献を目指し、活動をしています。この会は、二〇一一年度の公民館が「地域活動入門」と銘打った連続講座を組み、そこで出会った数人が「解散するのは残念だ、引き続き集まりをもっと活動しよう」と決めてできた会です。同講座に参加していた間瀬さんが発足当時から様々な面で活動を支えてくださったこともあり、倶楽部は今年で設立五年、会員数も増え、活動の幅も広が

りました。現在は、地域の高齢者が集ってあっと驚くお菓子を作ってお茶の時間を楽しみ、健康な生活づくりに役立つ情報をもとにおしゃべりをし、ハーモニカ演奏にあわせて大きな声で歌ったりなど、一回約三時間のプログラムを実施しています。

くにたちPODの初回に参加されたその方は非常勤で仕事依頼が入ってしまったので、同じ会のよしみで代わりに私に行ってみてはと勧めてくれました。私は久しぶりに大学教授の研究室を訪問できる魅力に飛びつきました。研究室の本、本、本に圧倒され、これほどの本を読むことを仕事の一部にしておられる武村先生のふしぎな柔らかな個性に惹きつけられました。

2 『道徳の教科書』をつくらうプロジェクトが浮上するまで

「本をつくる」が最初のテーマだったでしょうか。メンバーがおすすめの本を選定してプレゼンをしたり、和田さんの示した図から武村先生が会の方向性を見出したり、海図の無いセミナーは自在に変化していくものでした。その中でPODの方向性も、「本をつくる」から「道徳の教科書を作る」へと変化していきました。

武村研究室のメンバー、片岡さん、浦野さん、魚返さんの個性豊かな提案、国立市民館職員の高下さん、藤井さんがしごとをしなから毎回課題にしっかり応えている姿をすがすがしいなとみていました。市民として松本さん、間瀬さん、和田さんの多様な人格の取り合わせもまたこの会の魅力を作っていました。先生が用意してくださるお茶とお菓子は、和やかで意見が自由に交錯する空間に欠かせないものになりました。

武村先生の講義コマ数が少ない年だったという理由で一年間にわたる特別な学習が保証されたことを私は僥倖だと思っていました。しかし一方で、武村先生そして大学院生は国立市民と市職員との出会いと交流に何を求めておられるのだろう、時間とエネルギーを注ぐに値する集まりに自分なりに貢献せねば申し訳ないという気持ちでずっと抱いて参加していました。

3 「道徳を授業で教える」ってどういふこと?

私は道徳が含まれるのは実に広く多様であると思っていました。教科書が果たして作れるものなのか、はなはだ疑問でした。考えた末に、私は道徳を、人と出会い対話をし、そこから自分を豊かにしていくプロセスであり、実践力であるにとらえ、「客を招いて食を楽しむみつ会話を積み上げる術」を提案し、発表しました。というのも自分が職を退いて自由になった時間を、近所の人たちといっしょに食べる、しゃべる、知識や大事な生きる知恵を交換するために使いたいと願っていたからです。この精神の根底には茶道が提唱する一期一会の精神があります。日常の中にも一回性の出会いがあり、この時を活かきるための方策を探る中に人が道徳的に生きる一つの面が現れると考えたのです。

「道徳を授業で教える」ことはできる。しかしそれはAを教えたらBがしっかりできるようにって成果が上がったというようなものではないでしょう。道徳——しっかりこないことばですが、人としてどう生きるかを考える学習活動は一生かかって人が求め続けるものだと思います。生活のあらゆることがそのテーマになり得ます。

授業でできるのは、たとえば上杉鷹山を取り上げたとしたら、この人の考え方や言動を鷹山が置かれた時代や境遇の中で正確に理解すること、自分にはとてもまねできない立派な理想像とするのではなく、自分の今、そして世界の今とかかわらせて学ぶべきものを抽出することではないかと思えます。言うは易く行うは難しです。

4 私是一年間キャンパスに通い続けて手にしたもの

何より学ぶことは楽しいという実感を持ちました。ありがたいことでした。しかし人が学ぶようにタスクを創造することは大変です。それが教育の大事な側面だと思います。そういう意味で武村先生は一年間という限られた時間と回数を常に意識しながら学びを組み立ててくださいました。メンバーも精一杯学習に参画したと思います。この真面目な姿勢はメンバーとともに自画自賛したいと思えます。

一橋大学の研究が国立市民の学習にいかされて共有できることはとても貴重なことではないでしょうか。市民が大学に受講生として通う魅力もありますが、大学が社会教育の機関としての公民館にてくること、教授、大学院生そして市民が平場で学び合うことは意義深いことだと思います。くにたちPoDをはしりとして、二〇一四年度、二〇一五年度の二度にわたって公民館で連携講座が開講され、そこに市民の一人として参加できたことは実りそのものだと思います。

「くにたちPoD」の思い出

和田幸夫（くにたち国際友好会WING代表）

二〇一三年の三月頃だったと思うが、公民館がこんな案内を出しているよと妻が一枚のチラシを見せてくれた。その中の「一橋大学で出版社を作ってみよう」との呼びかけに目が留まった。読んでみると市民と大学がコラボして地域活性化の何かをやるよとの提案だった。日頃、妻からTVやパソコンばかりやって家でゴロゴロしていないで外に出てみたらと言われていたこともあって、面白そうだな、やってみるか位の軽い気持ちで参加することにした。

初回に集まったメンバーは市民が五人、先生と大学院生が合わせて四人、公民館職員二人だった。武村先生が、会の主旨説明の後、最近の話題として、「キュレーション」の話を出した。初めて聞く言葉だったが、ツタヤ六本木書店を例に、普通の本屋は政治、経済、文庫本などをジャンル別に並べるが、ツタヤは恋、美しい、冒険とかで並べている、要はそうやってある視点で情報を集めて分析し、それらをつなぎ合わせて一つの価値を持つものにするんだ………という話を聞いて、すこし前にツタヤ代官山書店を訪れたときに普通の本屋じゃないと感じたことを思い出した。翌日、自宅に三越伊勢丹新宿店から冊子が届き読んで見ると、売り場をリモデルグランドオープンさせ……ファッションとアートを融合させ独自の審美眼によるキュレーション……と書かれていてびっくり。我ながらミイハーとは思いつつ三越伊勢丹新宿店まで足を運び、「キュレーション」を体感してきた。どうやら婦人物を中心とした「キュレー

ション」であるらしく、それぞれ個別の店で売られていたハンドバッグ、靴、アクセサリー、帽子などが洋服の周りに集められ、コーディネートションされていて、いかにも先生に聞いていたものであると実感した。このシンクロに「くにたちP.O.D」で何か面白いことが起こりそうな予感を感じた。

翌月の二回目も忘れえぬ思い出になっている。自分の持っている本の中から十冊選んで来て下さいとの宿題が出た。面倒だと思いつながら、まあ整理するつもりでやってみるかと思心。五百冊位ある中にツンドク本もあって読み始めたりして結構時間がとられたが、整理し終わって良かったと思うことが二つあった。一つは本の指向がとても偏っていることに気づいたこと。元々、理系だったのでその類はほとんど処分したにしても、スピリチュアルや禅の世界、人生いかに生きるか、武士道精神、コンプライアンス、など精神性に関するものが多いこと。もう一つは人生の歩みや生き方を知る人生の棚卸が出来たことである。皆さんの発表を聞きながら、読む本を通して人生様々なあと感じる良き体験ができた。

また、この宿題が三回目以降進められた道徳教育をテーマとした活動の伏線にもなった。二〇一八年度から道徳教育が正式科目になることが決まり、時宜を得たテーマだと思つた。活動では、日本の道徳教育の歴史の変遷に始まり現状の課題を提示して、子供たちに何を (what) 如何に (how) 教えるかで議論百出した。六回にわたつた道徳教育でも毎回宿題が出たが楽しみに思うようになった。現役時代に人材育成や企業倫理、CSRなどに関わつていたこともあり自分の考えをまとめる良き機会になつたと思つた。くにたちP

O.Dの一年間の活動を振り返って見ると毎月一回の集まりが夜の七時〜九時の時間帯であつたにもかかわらず一度も休む事は無かつた。むしろ楽しみだつた。

その後、「くにたち国際友好会W.I.N.G」なる団体で異文化コミュニケーションや国際友好を図るボランティア活動をしているが、くにたちP.O.D時代の体験が生かされているので少しばかり紹介することにする。

W.I.N.Gで一橋大学留学生向けに「日本を学ぶ講座——これから就職を目指す留学生へ」と題して、くにたちP.O.Dで扱つた題材で講演した際、日本人学生も数人いたのだが、留学生より彼らの方が興味を示してくれた。それが縁で交流が深まり、彼らがGLP (グローバル・リーダー・プログラム) 選抜メンバーだったので短期留学した体験談をW.I.N.Gの例会で発表してもらい、留学生の英語スピーチの通訳してもらうなどW.I.N.Gの活動にも協力してもらつた。その後、彼らの一年間の留学日程が決まつた時、そのリーダーが自主ゼミをやるので講師になつて欲しいと頼みに来た。計六回分のプログラムを作つたが留学前の準備などで時間が取れず、結局二回しか出来ずに彼らは留学したが、そのリーダーは留学中の今もメールで状況を報告してきてくれている。今年の夏には帰国するが一年間の留学生生活でどれ位成長してくるか楽しみである。

また、現在はW.I.N.Gの活動で国立市が進めている「グローバル人材育成プロジェクト」で異文化交流や道徳教育などを支援している。くにたちP.O.Dをきっかけとして、内に籠つていた一市民からやつと国立市民の仲間入りが出来たかと思つている。